

# 中・ソ和解も予想

中 島 嶺 雄 著

## 中国——歴史・社会・国際関係

国交回復十周年を記念して中国 易に解きはぐしてみせている。

の趙紫陽首相が来日したが、私はこの人の名前を正確に知っていただろうか。また、現国家主席はだれか知っているだろうか。

本書は二十余年にわたって中国の現代を注視し続けてきた著者の、すでに刊行した十冊に及ぶ著作のすべてのエッセンスを、この一冊に凝縮した総集編ともいえるもので、中国民族の特質、中国社会の歴史、中国革命の軌跡、そして対日・米・ソを中心とする国際関係にもメスを入れており、とかく見えにくい国際政治力学をも平

都合五回、長期間の中国訪問で、現地の人や街、社会や風習を知悉（ちしつ）し、文化大革命の時はいち早くその矛盾を指摘したことも知られる著者の透視力は、本書でもさえており、とくに中国の現状分析から明日につながる問題の核心をえぐり出した個所はきわめて示唆的である。

その一つは、「毛沢東のリーダーシップのもとでは中・ソの和解は絶対的に困難であったが、非毛沢東化の進展にともない、中・ソの和解の可能性は十分ある」とす

る考察。著者は中国のソ連に対する評価に根本的な変化が現れ、「従来の八修正主義」という評価と異なり、ソ連はやはり社会主義社会だとの見方が大勢を占めている」と分析している。

そして現代中国は、毛沢東時代の「閉ざされた中国」ではなく「開かれた中国」を目ざしており、その歩む方向は「当面の厳しい中ソ対立にもかかわらず、中国はやはりソ連型社会主義、つまりかなりの時間差をもっていてもソ連と同じ道を歩むだろう」と、分析、予想している。

十億という膨大な人口を擁する巨大な隣国の抱えるさまざまな問題を、国際政治のダイナミズムの中でとらえなおした本書は、新書判という小型本とは思えぬ重量感のある一冊となっている。

（中央公論社・四八〇円）

## アメリカのベストセラー (Publishers Weeklyによる)

### フィクション

1. The Parsifal Mosaic, Robert Ludlum
2. The Man from St. Petersburg, Ken Follett
3. The Prodigal Daughter, Jeffrey Archer
4. Eden Burning, Belva Plain
5. The One Tree, Stephen Donaldson
6. For Special Services, John Gardner
7. Cinnamon Skin, John D. MacDonald
8. North and South, John Jakes
9. Celebrity, Thomas Thompson
10. Thy Brother's Wife, Andrew M. Greeley

### ノンフィクション

1. Jane Fonda's Workout Book, Jane Fonda
2. Living, Loving and Learning, Leo Buscaglia
3. No Bad Dogs: The Woodhouse Way, Barbara Woodhouse
4. Richard Simmons' Never-Say-Diet Cookbook, Richard Simmons
5. America in Search of Itself: The Making of the President 1956-1980, Theodore H. White
6. A Few Minutes with Andy Rooney, Andrew A. Rooney
7. When Bad Things Happen to Good People, Harold S. Kushner
8. The Fate of the Earth, Jonathan Schell
9. The Umpire Strikes Back, Ron Luciano and Dave Fisher
10. Years of Upheaval, Henry Kissinger

(© 1982 by Xerox Corporation)

(この欄は隔週掲載)

といったことは起こりえないのである。

みな展開がなされているのである。

このような実証を踏まえて

残された問題も少なくはないが、いわゆる金利の期間構造問題について、今日までになされた実証分析としては、手法においても、周到さにおいても、最高の出来といつてよく、国債問題について多少と

も真剣に考えようとする人にとつては欠かせない業績であるといえよう。

東京大学名誉教授

館 龍一郎

(東洋経済新報社 四〇〇〇

円)

本書の中心は、この対立する仮説の妥当性について、昭和五二年以降のデータを使って検討することであり、この過程で、従来の理論と分析手法とがきわめて手際よく展覧されている。すなわち、最も単純な利回り曲線による分析から、モジリアーニ、サッチラの構造式による分析へと進み、それらのアプローチの持つ問題点を指摘し、期待形成と金利裁定を区別するために期待形成に時系列分析の手法を利用するというきわめて巧

さて、このような検証によつて著者が得た結論は、第一に、わが国の国債利回りの期間構造の決定については、期待理論の妥当性が従来考えられていたよりも遙かに高いこと。第二に、市場分断仮説は直利指向仮説を除くと、ほとんど妥当性を持たないこと。第三に、長期ほど、国債の利回りに対する期待インフレの影響は大きい、完全に利子率に反映されるわけではなく、三〇〜四〇%にとどまること、などである。

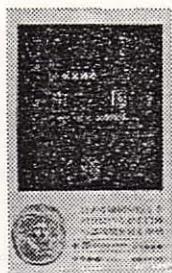
金利構造の問題としては、著者自身も述べているように国債以外の自由金利との関連をどのように分析するか等、

## 生き方のしたたかさを見直す

### 『中国』

——歴史・社会・国際関係

中嶋 嶺雄 著



「この一冊を読めば現代中国をめぐる諸問題がほぼ網羅的に解明できるといふ本がわが国にも欲しいと思つてゐた。それが本書執筆の動機である」と著者が言うだけに、本書は「中国民族の特質や中国社会の個性、現代中国の歴史、そして中国をめぐる主要な国際関係がすべて盛り込まれている」。

すなわち、新中国三〇年の歩みはもとより、中国内部の非毛沢東化、中ソ関係、米中関係などアップ・ツー・デイトな問題に近い将来の展望をも含め、きわめてわかりやすく整理されており、鄧小平副主席指導下の中国がいま歴史的に見てどのような位置にあり、どのような課題を抱えているかがよく理解できる。中でも出色なのが「中国社会の特質」(第一章)、「革命と伝統」(第二章)、「アジアの現実と中国」(第七章)など現代中国の諸問題を古き中国との葛藤関係でとらえ、そ

## 読書



著者の中嶋氏は、「この一冊を読めば現代中国をめぐる諸問題がほぼ網羅的に解明できる」という本がわが国にも欲しい」という意思によって、本書を著された。この意図は成功している。

中嶋氏の中国研究二十年の成果が、本書の中で発揮されているが、特にすぐれている点は、氏が事実に基づいて、

冷静かつ客観的に現代中国を分析しておられる点である。現代中国については、非

常に多くの人が関心を寄せているにもかかわらず、「事実に基づいて、冷静で客観的な分析」をする研究者はあまり多くない。北京の語ることばすべて正しいという北京崇拝型研究になるか、およそ共產主義などというものはすべてけしからぬという形での中国研究か、この二つのパターンのいずれかに属する人があま

りに多すぎるのである。

こうした中で、氏が歴史、

人物、国際環境、思想、経済

といった、あらゆる角度から現代中国にメスを入れて、日

本および日本人が中国とかわるときには、感情やイデオ

ロギーにとらわれず、多面的に現実主義的に物事を処理していく必要を説いている点

中

国

中嶋

雄著

578/1 日記

## 革命後を客観的に解明

は、現在はならんしている皮相な中国認識に対する貴重な警告となっている。

個々の細かい問題の解釈の仕方については、必ずしも私の見解と一致するものばかりではない。しかし中ソ関係が今後は改善されることになる

意味をもっているとする氏の指摘にも、同感である。

事実をふまえて描かれる中国の実相描写は明快で、わかりやすい。ただ一つ難点を言えば、氏が研究者として誠実

であろうとする余りに、非専門家や初学者にはなじめない語句や引用がいくつか出て来る点である。中国を理解するための手ごろな本がきわめて少ない現在、もう少し平易な書き方をしてもさしつか

えなかったのではあるまいか

本書の水準は大変高いので、中国研究家でない人が「一気に」読むのは、骨が折れるかもしれないが、読了後の収穫は大きいはずである。(中央公論社、新書・四八〇円)

国際事情研究センター主任研究員

小倉 節子



# 新刊



「中国」

中嶋 嶺雄 著

「この一冊を読めば現代中国を解明できる本を」というのが執筆動機。農村・人口問題から始まって歴史と伝統、米中、中ソ問題まで現代中国が抱えた問題をほぼ網羅。その一方で、日本人の心情を

「土」、中国人を「文」と見るなど著者独自の視点で魅きつける。

(中央公論社・480円)

「パトカーで駆けめぐる

ニューヨークの昼と夜」

水野 晴郎 著

映画評論家である氏の、もう一つの肩書？は「警察研究家」。とにかく無類の警察ファンで、今回は、制帽制服をつけ、パトカーに同乗しての市警勤務体験記。

(近代映画社・1380円)

「吉岡先生のテレビ寺子屋」Ⅱ

吉岡 たすく 著

TV23局ネット放送中の教育番組を活字化したもの。勉強するとかしないとかは、問題ではない。一番の教育は、父母が仲良く暮らしている事実こそ大切。その中で子供の人格が形成されてゆく。父兄、母親に一読をすすめたい。

(サンケイ出版・980円)

められたものの中から生じた、弱さのあらわれとしての行動なのである。この点からすれば「道徳教育の強化」などということがいかに的外れであるか、あまりにも明らかであろう。

また森有正の「経緯」と西田幾多郎の思想との親近性(対立をはらみながら)の指摘も、西田の文章の仏訳が森の書いたものではないかと思われたというエピソードとともに興味深い。

著者は「パトスの知」の観点から、バリ島とナポリについてたびたび論じている。とくにバリ島の文化の、技術文明の基準とは全く違った基準による豊かさについて、またヴィーコ、トマス・アクイナス、ジョルダノ・ブルノ、カンパネラ、デラ・ボルタ、ベネディクト・クロチエらの思想を生み出したナポリの歴史的風土について語っている。

しかし私はここでは若干の危険の念を持たざるを得ない。それは著者も一応ふれている一九六五年のインドネシアのクーデターの際の大虐殺についてである。それは「バリ島でも」行われたのではなく、バリ島でこそ最も激しかったのである。そうしてそのことはバリ島における

「文化」のあり方と無関係ではないであろう。またそれは、極めて温和で非好敵的と思われていたカンボジア民族の間で最近行われた惨劇とも通ずるものがあるのではなからうか。

問題は、パトスの「知」とは何か、つまり「パトス」自体をある意味で客観化し、相対化するような自覚的な知的操作が、どのように行われるかということであるように思われる。著者は「パトスの知」について語る

とき、それを「ロゴス」に対立するものとしては提示していない。しかしながら「ロゴスなきパトス」の危険性を、「パトスの知」がどのようにして乗り越えられるかについても、十分説得的に示しているとはいえないのではなからうか。この点「ナポリの生み出した思想家」については多くを述べる事ができても、「バリ島の生み出した思想家」はいないという差は重要であると思う。

私は著者の提起した「共通感覚」「コモン・センス」の重要性は高く評価したいと思っている。しかしそれは、「科学の知」に対立する「パトスの知」の根拠としてではなく、「能動」「受動」の対立を超えた、

## 500字紹介

一九七六年秋の毛沢東の死去とそれに続く四人組の追放は、中国政治にそれまでつきまとっていたミステリアスな中嶋嶺雄

### 『中国——歴史・社会・国際関係』

中公新書  
四八〇円

要素を一気に減少させ、最近の対外開放政策による情報量の増大と相俟って、「中国について」は底が割れた」といっ

海は生命の源というイメージがある。「海の幸」という時は、青く澄み切った海が連想される。だが、海はきれいな

### 清水 潮

### 『海の微生物たち』

大月書店  
一二〇〇円

であればあるほど、生物にとっては栄養分が少なくて、生きるのに過酷な環境である。本書はこの矛盾を、海中微生

た風潮を、一部に生み出しているように見える。とかく日本人が陥りがちな「同文同種」の錯覚もこれに拍車をかけている、といえよう。

多年にわたってこの巨大な隣人を、醒めた目で追求・分析し続けた著者が書き下ろした本書は、よきにつけ、あしきにつけ、中国を理解したつもりになっている日本人に、一種の警世の書となっている。

とりわけ、革命後、すでに三分の一世紀を経過した中国が依然として古い歴史と文化がもたらす「伝統の呪縛」「社会の不易固定性」にあえいでいることを、かつての毛沢東政治の軌跡をたどりながら明快に解説している部分は、強い説得力を持つ。

こうした社会体質を持つ中国は、流動性に富んだ日本とは本来、全く異質な国家なのであり、むしろ相互の摩擦が運命的に生じやすい関係にある」との指摘は、「日中友好」をとかく情緒的にとらえがちなわれわれに、改めて足元を見つめ直すことを促している、ともいえる。(正)

物研究の最新のトピックスを紹介しながら解き明かしてくれる。

解答の一つは、栄養物質が生態系を循環する時の回転の速さである。栄養物質はすみやかに植物プランクトンに利用され、プランクトンはすみやかに魚などの動物に食べられる。従って、栄養物質としてとどまる量は少ないまま、多くの生物の生存が可能になるのだ。

そこではプランクトンの増殖速度が大きな役目を果たしたが、もう一つの重要な微生物は細菌である。海中でもまた、細菌は生態系の最底辺を支える生物として大きな役目を果たしている。自然に生じたものとともに人間活動によって大量に海に流入する有機物を分解、浄化するのも細菌である。

東京湾では、微生物による自浄作用の限界を超えた有機物が流入している。だが、湾内の海水は二カ月で外洋と入れ替わるという。適切な手段さえとられれば、東京湾でさえ生き返らせる希望はあるのだ。(友)



ンから計器に至るまで航空機を支える技術を総まとめとして要領よく理解させる。(日本工業新聞社・一五〇〇円)



科学ってこんなに面白い

崎川 範行著

たまは洗われない方が長持ちするといわれている。洗うと汚れやサルモネラ菌が流れ落ちてきれいになるが、表面を覆っているクチクラ(細胞類の侵入を防ぐ物質)も洗われ落ちてくるからだ。台所、居間、家の隅隅を見まわして日常生活の中から話題をひいて解説した。女性のための科学講座。

(P・P研究所・九八〇円)

中国・歴史・社会・国際関係

中嶋 慎雄著

「現代中国」の解明に積極的な執筆活動が続ける著者が、氏独特の中国への視点を簡明にまとめている。中国をどう認識するかに始まる。中国の革命の伝統、中華人民共和国の歩み、そして対米・ソ・日関係と中国と中国と特殊な世界を現代世界の激動とのかわりあひのなで鮮やかに浮き彫りにする。精選は一書。

(中公新書・四八〇円)

元禄文化 西鶴の世界

谷脇 理実著

本書は、浮世の人生の諸相を描きつくした井原西鶴の生涯と作品の軌跡を追うことによって、元禄文化の神髄に迫ることに意欲作であり、著者は著者の両眼を著者である。元禄文化を真正に賞讃して述べることを通じて、あくまで西鶴の独自性にたつた態度には、西鶴への深い造詣と見識がうかがわれる。

(教育社・八〇〇円)

生活者の

川添 登著

てを再び試みられるべきものかもしれない。

著者は「自動車生活学」さえ可能ではないかと主張して、今和次郎の視点を現代に生かしてみせている。だが、生活学の提唱は、今和次郎なしでも成立する生活学を示すことによって、はじめて現代の雑沓行為となるのではない。メーカ・的発想による合理主義と批判されることの多い昭和三十年代後半のメタボリズム運動の提唱者であった著者に対して、われわれはそれを期待する。だが、本書が大きな問題提起の書であり、広く誦まれ、考えられるべき内容をもっているとは事実である。(トマス出版・三三〇〇円) 東大助教授 鈴木 博之

著作の過程を浮き彫り



名作こぼれ ばなし 巖谷 大四著

この本は本紙朝刊の読書欄に連載された短文を集めたものであ

る。明治、大正、昭和にわたる百十二人の名作をとりあげ、作品が書かれた動機、作家のかくれたエピソードなどを語っている。東大の学生だった坪内逍遙は、外人教師に「ハムレット」の試験問題で悪い点をつけられ、発奮し

たのが、「特別阿房別荘」であっ

井上ひさしの世界

井上 ひさし他著

ベストセラー『吉里吉里人』の著者、井上ひさしは、また演劇界を代表する脚本家でもある。本書には、小沢昭一の『おぼろ座』の旗揚げ公演「国語事件殺人辞典」の脚本、井上と小沢との対談、井上演劇に関する評など

が収められており、言語改革の旗手と称される著者を

知るための格好の書だ(岩波

空中楼閣

津村 節子著

見合いで晩婚の彩子は、自らのリーダーシップで家を手

いま、中世の秋

堀越 孝一著

の秋のあとをたどって、著者はその名作再演の旅に立つ。本書はその追体験の旅を通じて、著者が感じた歴史の、か

つわしさをえがいている。その他のエッセーにも著者独自のロマンチズムと歴史観がきびきびと顔をのぞかせ、広義の歴史文化の編纂を語りかけてくれる。(小沢書店・一四〇〇円)

李朝陶磁新考

出川 直樹著

柳宗悦以来、日本の愛陶家は李朝の白磁や染付に、悲愴の美を覚えたが、この李朝陶磁に疑問を提示するのがこの本。著者は韓国の古い窯跡や各種の工芸品をめぐり、その主観性を鋭く、その論旨は、いわば客観性重視にせよ、柳の民芸論を全面的に再検討する。李朝陶磁名品集も有難。(創

か、決定された歴史。畢竟、現しての読者の責任、地にかいて受けとられ、また実う。このような記者

尾崎 秀樹著

ソルゲ事件と



尾崎 秀樹氏

現在、文藝評論において、とまさにその前後とくに大衆文学研究の分野で、独 十六年の夏、帰国中の自の位置を占めている尾崎秀樹 共産党員、北林トミで逮捕されたこと

真相

氏にあって、その原稿ははかりを官憲に送られたのであったことは、い

書評

〈學術・研究・思想〉



谷川 晃一・画

島 誠

「かの中の朝鮮」(第七回) 時鐘の長編詩二冊について。金時鐘は、なぜ日長編詩を書いたか、いやとが出来たか。「日本に日本人がこの土地の社会生活に部分に興味を払散し」のに対して、在日朝鮮人

回する。そして戦争中に日本へ帰るが、横浜事件にひっかかれて逮捕されひどい拷問を受けた。灯台社の明石順三などとともに、こうしたわれわれにあまり馴染みのない人物が魅力的に描かれる。金時鐘、大河内光孝、明石順三、彼らは戦中から戦後の日本に生き、共産党員とはまた違った待遇を日本の権力と民衆の双方から受けた。著者は、「ある種の戦時民主主義」

中嶋 嶺雄著

中国 歴史・社会・国際関係

たり得る」「現代中国学」の確

本書は、新書判であるが、最近の著者の「現代中国学」の到達点を示している、とい

著者は、「総合科学

立をめぐり、精力的な著作活動を続けてきた。後学の評者からみれば、中嶋「現代中国学」はすでに「十分に確立して」いる。「柔軟な」中国認識の座標軸」からの「よりリアルな中国像の形成がそ

て中国政治の「大筋のシナリオ」や底流について、予見しうるのが当然だ」と断言できるのである。本書は「現代中国をめぐる諸問題がほぼ網羅的に解明できる

永遠不変性」である。著者は、これに「工業社会」「開かれた中国」「にたいする不応性」をみる。しかし同時に、これに「中国社会に適合し調和した普遍的妥当性」さえも、著者は感

たとえは著者は、非毛沢東化による「開かれた中国」の進展を示唆する。毛沢東型政治の否定だけで、中国政治の様々な問題が解消され、「開かれた中国」の政治が形成されるのだろうか。毛沢東型政治が否定されても、それを許容した一党独裁制は存続し、さらにそれらの

のために「現時点においてこそ必要不可欠であるはずの本来的な文化革命を遂げる」とそれ自体を、中国の指導者は「禁忌してしまっている」。とすれば、「不可逆」なはずの「開かれた中国」への道は、「閉ざされた」ままにならないであらうか。

新しい構想による書き下し

著者の「現代中国学」の到達点をしめす書

小島 朋之

いま一つの軸は、「開かれた中国への歴史的転換の不可逆性である。著者は、いま中国政治は「決定的な非毛沢東化」の段階に入り、「ふたたび毛沢東型政治へと回帰できない」。

本書の成否の鍵は、この二本の軸が平行線ではなく、交叉して「変容の中国」と、変わる中国を連結した中国像を描いているかどうかにある。ここに、若干の疑問を感じ

本がわが国にも欲しい」という動機から新しい構想のもと「書き下ろしたものである。」「新しい構想」は、「中国認識の座標軸」軸にみられる。一つの軸は、現存する「中国社会の

「多様性や合理的な最優体制を不可欠とする」ところが、「最適体制」と対立する「民族の共同性」が「固定的」に現存したままである。しかも、このような「旧中国の超克」

また著者は、一方で伝統的な「民族の共同性」の存続を認める他方で、「工業社会」「開かれた中国」の建設を「逆転しない社会的・国家的要請」と主張する。「工業社会」は「多様性や合理的な最優体制を不可欠とする」ところが、「最適体制」と対立する「民族の共同性」が「固定的」に現存したままである。しかも、このような「旧中国の超克」

★なかじま・みねお氏は東京外語大学教授国際関係論専攻。東京外大卒。著書に「現代中国論」「中国文化大革命」「中ソ対立と現代」「北京烈烈」など。一九三六(昭和十一年)



やラオス、ベトナム国内の反政府勢力にも支援を行っている

②中国はベトナムを“アジアのキューバ”とみなしている③

ベトナムの側も中国が自国の安全保障にとって今後最大の脅威だとする基本認識を固定させている——などの点を指摘、

「ベトナムがカンボジア問題で譲歩して撤兵しても、さらに中ソ和解が生じて、中越間の緊張緩和は考えられない」

「中越間に新たな戦争がほつ発する可能性も決して除外できない」などの見通しを示していたが、中越間には二千年来の

激しい敵対の歴史が有機的に介在しているだけに、外部の国際環境の変化とは関係なく中越対立は継続するとみていい。

ただ、中国、ベトナムが七九年二月のように正面切つてぶ

つかり合う事態はまず考えられず、対立はむしろ中国軍のラオス北部侵攻、ベトナム国内の反政府勢力支援、国境での小

ぜり合いといった形で展開するのではなからうか。さらに、中越両国が領有権を主張し合っている西沙、南沙群島で領有

権をめぐつて対立するという“海の中越対立”のシナリオも想定できよう。いずれにせよ、中越対立は今後も長期間続く

とみられ、引き続き東南アジア最大の緊張要因となることだろう。

こうして、東南アジア情勢は中ソ関係改善、ソ越同盟の亀裂、中越対立の継続という三つの動きが絡み合つて複雑な推移をたどるものとみられる。

読書

中国

歴史・社会・国際関係

中嶋 嶺雄 著

国際善隣協会常務理事 安達 為也

この一冊を読めば現代中国をめぐる諸問題がほぼ網羅的に解明できるといふ本がわが国にも欲しい、という著者の願望が本書の執筆の動機である。この小著の中に、中国民族の特質や中国社会の個性、現代中国の歴史、そして中国をめぐる国際関係をすべて盛り込んでみよとの著書の試みである。したがって、中国問題を考えるに当って大いに参考になる手頃な著書といいうるであらう。

序章 では、全世界にたえずさまざまな問題を提起している“中国の特質性”を強調し、中国革命はどのような果実をもたらし、中国の民衆をいかに変革したか、その担い手である中国共産党や積年の毛沢東政治はいかなる歴史的役割をはたしてきたか、という問題を提起している。観念的な美化や称讃がいかに中国像を歪曲してきたか、あまりに固定的、一面的な中国認識に対し、将来中国社会の巨大なダイナミックスとその深淵を内在的にとらえようとする、そして中国の将来のさまざまな変化にも動じないだけの柔軟で実行のある中国認識の座標軸を構築することを提唱している。

第一章 中国社会の特質では、その村落共同体と農耕官僚性という中国民族の属性のゆえに、いかなる政治混乱にもかかわらず中国社会



東京外国語大学教授 中嶋嶺雄 著

中 国  
——歴史・社会・国際関係——

(中央公論社 昭和57年5月 新書判 242頁 480円)

〈紹介にあたって〉

本書は、中国民族・社会の伝統的特質、中国現代史、中国をめぐる国際関係について相互に関連づけながら解説し、現代中国の政治的・社会的課題を分析指摘したもので、一衣帯水を隔てた隣国でありながら、今ひとつ把握しきれない国、中国に対する認識を深めるには恰好の書である。

著者の中嶋氏は、日本人が中国を論ずる際、何らかの感情を交えがちで、ともすれば事の真相を見誤りやすいことを指摘し、自らは冷静かつ客観的な中国観察を試みており、その観察を通じてなされた中国分析は極めて明快である。

紙幅の都合により一部をダイジェストした。 (木内)

## 1. 中国認識の座標

顧みると私達日本人の中国認識は、過度の美化・礼讃と、その裏返しとしての極端な誹謗・蔑視とを相互に繰り返すという、<sup>おもね</sup>阿りと侮りの往復循環に陥っていると同時に、「同文同種」の親近感から恣意的・心情的なものが少なくないように思われる。このような認識では、中国をめぐる数々の問題を解明できないばかりか、中国に政治的・社会的変化が生ずるたびに、従来の認識がたちまちその有効性を失ってしまうことになりかねない。中国という巨大な国家が国

際政治の上で極めて重要な存在であること、その巨大な国家が日本にとっては永遠の隣国であることを考えあわせると、中国社会的な巨大なダイナミックスとその深淵を内在的にとらえ、かつ中国の将来の変化にも動じない、柔軟で奥行のある中国認識の座標軸を構築することが、さしせまって重要である。

今日の中国は、政治的変動があまりに大きいがゆえに分析・観測が困難であり、ましてやその変動を予見することなどできないという見方も一部に存在するが、個々の政治的事件はともかくとして、大筋のシナリオや底流については予見しうるのが当然だと考える。そのためには、中国についての広範な知識、深い研究、情報・データの収集・検索も勿論だが、より根本的には中国分析の方法論を身につけること、中国の政治文化・中国民族の発想の特異性・中国社会の伝統的諸特徴を知ることが必要である。たとえば『人民日報』を情報として利用する場合には、この機関紙が、宣伝・教化のためのメディアであること、中国共産党内部に闘争が存在する時は、権力中枢を掌握している側の勢力の意見を代弁するものであること、従って中国社会の全体的意見を反映したものとはかぎらないことに注意しておく必要がある。また、中国的発想には一種の逆説性があり、党が「わが国は現在最も安定している」と語った時期こそ、実は政治的に極めて不安定かつ深刻な状況にあったことを示す事例が数多く存在することも忘れてはならない。

そして何よりも重要なのは、中国の事態を評価する場合には、一種のバランス感覚において常識的に考えてみるということである。たとえば、中国社会のマイナス面すべてが「四人組」に帰せられていた時期、中国の民衆の中に、その「四人組」を最高指導者とした毛沢東・共産党に対する疑念もまた生じていただろうことは、常識的に考えてみれば気づくはずである。そのことに気づけば、今日の中国において非毛沢東化が進行しているという事態が容易に理解で

きるし、そのような事態の到来の可能性を予見することもできただろう。

## 2. 「閉ざされた中国」から「開かれた中国」へ

中華人民共和国の政治史は、大づかみに言えば、毛沢東に代表される急速な社会主義化を志向する急進派と鄧小平らに代表される現実主義的な穏歩派との政策対立・奪権闘争の歴史であり、この両派が交互に権力中枢を掌握して右から左、左から右へと内政の基調が大きく揺れ動いた激動の歴史であった。「文化大革命」から「四人組批判」「毛批判」「四つの現代化」へと至ったここ 20 年程の中国の内政変動も、両派の対立によるものである。「文革」以前の 6 年程は、「穏歩派」が政治制度・党内機構の重要なポストを押え、現実主義的な政策を推進していたが、こうした状況に危機感を抱いた毛沢東は、大衆特に青年に直接呼びかけて大規模な反穏歩の大衆運動を喚起して奪権をはかった。この、毛沢東独特の政治戦略すなわち、大衆運動のエネルギーを利用して、制度機構と  
いった秩序を破壊する形、いうなれば非合法的な「革命」の形式で権力を取り  
戻したのが、「文化大革命」であった。しかしこの後、毛沢東の死を契機として流れは全く逆転し、鄧小平を筆頭とする反文革派が再びリーダーシップを奪い返した。反文革派は、毛沢東政治・文化大革命の後遺症である社会的・経済的混乱の收拾につとめ、イデオロギーによる大衆運動を原動力とした急激な社会主義化路線を改めて、制度・機構の整備による秩序だった社会主義化のプロ  
ラムを定めた。そして、工業体系・国民経済体系を建設するという「四つの現  
代化」、非毛沢東化の推進を国家目標として、今日の鄧小平＝胡耀邦体制への基盤を整えたのであった。

この今日の中国が、ふたたび激動の政治過程をくりかえし右から左へと大きく揺れ動くことがあるだろうか。私は、大局的に見た場合、将来中国の内政の



基調がふたたび大きく変動することはないだろうと考えている。文革の挫折以来の現実主義的潮流、工業体系を確立し、長期的安定的経済体制を建設するという「四つの現代化」の方向は、今日の中国にとってもはや逆転しえない社会的・国家的要請だからである。こうした要請は、中国の対外関係をより開かれた安定性において求めることへつながってゆき、「閉ざされた中国」から「開かれた中国」への変質を余儀なくする。その結果中国は、工業化された外国と自国との格差をますます切実に認識することになる。外部世界の現実を知れば知るほど、大衆も、「貧困のユートピア」を夢みた毛沢東型「革命」によっては、2度と熱狂することはないであろう。今日の中国は、すでに Point of No Return(後戻りできない地点)を通過したのである。

### 3. 現代中国の課題

「四つの現代化」という国家目標をようやく設定した中国が経済的・社会的発展をとげるためには、解決すべき多くの困難・矛盾が存在しているが、なかでも農業と農村の問題は、依然として人口の80%が農民といわれる農業国、中国にとってどうしても避けて通ることのできない課題である。そこでまず必要となるのは、農業集団化そのものの再検討であろう。毛沢東によって画一的に集団化された農業をいかに制度的に再編するか、中国にとっての最適農業形態の発見を大胆に志向しうるかどうか、そして中国農村社会から失われてしまった道教的自由放任・精神的安息をいかに復活させるかにこそ、未来へのカギがあるように思われる。これらが成功した時、そして、ようやく中国が試行しつつある各省の分権的・独立的な自主がさらに省ごとの競争関係へ大きく発展し、同時に社会主義的民主主義の制度的保障が確立されてゆくとき、中国は初めて、社会主義的近代化のための中国独自の形態を探し当てうるだろう。

こうした状況のなかで、中国大陸沿岸諸省を中心とする工業基地建設が、台湾、香港などとの経済的競合や交流のもとに進捗し、華僑資本が広範かつ安定的に投下されるならば、一省または数省の工業化の実験的成功が中国社会全体に大きなインパクトを与えることも可能であるかもしれない。いずれにせよ、まだまだ前途は厳しいといわねばならず、中国はいよいよ「開かれた中国」への本格的な試練に直面せざるをえないのではなかろうか。

「開かれた中国」へのプロセスにおいては、中国民族・社会の閉鎖的特質、「外国嫌い」の反動であろうか、「外国崇拜」の風潮、それによる病的現象が社会内部にはびこっている。このような時期に中国にとって必要不可欠なのは、社会主義と資本主義との、中国社会と外部世界との、そして伝統と現代との文化的・文明史的角逐と苦闘、そして相互滲透とその超克過程であり、そこに派生する諸問題（「外国崇拜」「文化汚染」といった外部からのインプットによって生じる問題や、「日和見主義」「官僚主義」といった内在的問題）を、理論的にも思想的にも克服してゆくための、まさに本来的な意味での文化大革命のプロセスにほかならないはずである。

このように、克服すべき多くの困難が横たわっているとはいえ、中国があらゆる点で国際社会における吸引力を有していること、つねに大胆な世界戦略を保持しつづけるであろうことを考えると、中国はやはり侮りがたい巨大な存在である。私達は内政面のみならず、国際社会における中国の将来につねに注目し、中国問題をより深い次元において考えつづけてゆかねばならないだろう。

# 経営者 ダイジェスト

日経連 研究資料室

No. 537

57. 12. 1.

○日本は没落するか

—欧米とどう違う—

小林 良彰…………… 1

○モチベーション

松井 資夫…………… 6

○重役責任

—取締役はどこまでリスクを負うべきか—

牛場 靖彦……………12

○中国

—歴史・社会・国際関係—

中嶋 嶺雄……………18

○最近の所論から……………23



は解体しないと指摘している。

第二章 革命と伝統の中では、三千有余年を刻んできた社会が、わずか三十年間の社会主義的建設の過程でその伝統や民族的、文化的個性を完全に変革したなどということはとうもないことであると結んでいる。

第三章 中国革命の軌跡では、辛亥革命以来の革命の歴史を分析し、毛沢東の「貧困のユートピア」、その中の軍事思想と強烈なナショナリズムの本質を説明している。

第四章 中国人民共和国の歩みでは、毛沢東型社会主義建設以後、非毛沢東化「開かれた中国」の旋回等の歴史の中で、また、中国をとりまく国際環境の変化の中で今日の巨大な転換は、社会主義の諸原則に抵触するもので、中国が今後毛沢東政治との訣別をいかなる未来へと切り開いてゆくのか、きわめて重要な課題であることを指摘している。

第五章 中ソ対立の現代では、一般的には、中・ソの一枚岩の団結という神話にとりつかれていたが、その後、中・ソ対立の歴史を克明に追ひ、中・ソ関係の将来を展望するために、中・ソ対立に関する理論的・方法的な枠組を提示している。結論として、対立と依存を繰り返しているが、中・ソ間がやはり社会主義国同士の関係として将来改善される可能性は、国際共産運動における中国共産党の兄弟関係の将来の変化とともに論理的にも、実際のにも高まってきたと展望している。

第六章 米中関係の歴史的展開では、米中対決とアジアの冷戦、ニクソン・キッシンジャー路線による米中関係の転換、それによる日中国交の樹立促進、最近のレーガン政権と台湾問題等を記し、米中関係と中ソ関係の将来は国際政治の重要なテーマとしている。

第七章 アジアの現実と中国では、アメリカのアジアから撤退のあとの「アジア集団安保構想」としてのソ連のアジア政策に対し、「中

国的世界秩序」の重層的に交錯している事実を指摘し、今日のアジア諸国には、そこに広がる「中国の影」のもとで「真の脅威は中国である」という不安感が広範に潜在していることは否定できないとしている。

第八章 日中関係の過去と現在では、日中民族の異質性の認識の必要をまづ取りあげ、明治維新以来の日中関係の歴史、ならびに戦後中国の日本における反米斗争支援の時期から日中関係断絶、その後の日中友好の過熱ムードとなつた中国側の要因を分析するとともに日中友好平和条約締結の覇権条項の意味するところを説明し、この条約の締結はソ連の侵出、カンボヂヤ問題等今日の国際環境を「新しい冷戦」へと大きく変化した重要な原因ではないかと指摘している。

終章 現代中国の課題では、今日の中国は「閉ざれた中国」から「開かれた中国」への離陸を開始している。中国の当面の選択肢は

1. ソ連型社会主義に回帰するか  
2. 資本主義的な市場メカニズムを導入した「ユーゴモデル」にすを

の二つである。現在では後者の方向に進んでいるが、ユーゴのような民主主義的政治システムは中国の政治文化にもっとなじみにくいものである。

中国社会主義の根本的ボトルネックである農業と農村では

(1) 農業集団化そのものを検討する必要はないか

(2) 中国革命が儒教的桎梏を打破し、道教的原理を拒否したことは中国農村の民族性を損い生活の活力を失わしめていないかを指摘し、また、国際問題では、鄧小平副総理が「中国にとっては日中関係は世界戦略の一環です」といった言葉を記憶にとどめておくべきであろうと結んでいる。

(中央公論社発行中公新書 定価 四八〇円)



## 『ダンの企業審査事典』

ハロルド T. レディング&ギューイ  
ン H. ナイト=著/森田 房雄=訳

不良債権発生防止のための審査業務は与信機関の命ともいべき業務であるが、これに関する権威的なマニュアルはこれまで我が国にはなかった。この本は、1841年以来、信用情報を収集し、信用分析のための手続きや手法を開発し、産業界別に与信リスクの度合いを見きわめ、審査業務に関するあらゆる局面への対応策を研究してきたアメリカの Dun & Bradstreet Inc. が自ら蓄積してきた経験と知識をもとに、一連の審査業務の内容を実践的に平易に解説したものである。アメリカと日本の法制、会社組織、責任と権限のあり方などについて多少の差異はあるが、与信審査業務に携わる人にとって参考になるところは大きい。(4000円、日本経済新聞社)

## ■辞典・事典■

れを解明しようとした部分である。従来のように、革命とか社会主義とかいう視点からだけでは現代中国の苦悩を知ることができない。  
たとえば中国農村には血縁(宗族)・地縁(同郷)集団としての共同体——族長の家父長的専制と家産均分主義を特徴とする——が残されており、この共同体原理は、都市のギルド、同郷・同族集団、隣保集団、秘密結社、官僚集団、政治集団、軍人の集団をも貫いている。

するかが、中国指導者たちの最大の課題だったし、今もそうである。故毛沢東主席が発動した「大躍進」「文化大革命」もそれが大きな狙いだったが見事に失敗した。  
では鄧氏はこれにどのような挑戦しようとしているのか。その見通しは……。克服の道について著者もまだ明快な回答を明示できないでいるようだ。

しかし「中国という永遠の伝統社会」として、その(農村の伝統的共同体などの)変革は容易ならざる課題である。それゆえに、中国というこのたぐい稀なる歴史的な社会と国家を論ずるにあたっての重要な課題は、革命と伝統との拮抗と相関が織り成すダイナミクスを、どのような視点において統一的にとらえるべきかという問題であろう」という著者の視点は新鮮であり鋭い。今後の著者の研究成果が期待される。

なお、伝統中国と外交との関連で興味深いのは、中国の「五服説」という世界秩序観を紹介した件である。「五服説」とは「世界の中心として  
の中国(中華)の周辺には、都から五百里ごとの距離にしたがって中華王朝に服従すべき国々が五つのランクに区分されていた。そして距離に応じた親疎の度合いによって中華帝国への朝貢の回数が異なり、また帝国による支配・統制ないし支援の濃淡が異なる」というものである。  
近隣の東南ア諸国は、こうした中国外交の伝統をリアルに知っている。その点、中国の外交を見詰めるわが国の目に甘さはないだろうか。(Y)  
(中公新書 四八〇円)

## “経営情報”の在り方を示唆 『トップの情報学』

集める・選ぶ・活かす・捨てる

飯塚 昭男 著



資源を配して働きかける営為である。従って環境に関する「情報」への姿勢は経営者の生命ともいえるべきものである。  
本書は、著者の経営ジャーナリストとしての二〇年を超えるフィールドワークを通じて

## “量”より“質”の充実をめざす総合オペレーター

海運日本の中核として、海運業ひとすじに堅実な歩みをつづけ、産業と生活を支えている昭和海運。1980年代——“量”より“質”の充実をめざす総合オペレーター・昭和海運では、新時代に即した輸送体制で、いっそうの安全運航とサービスの向上をめざしています。



## 昭和海運

東京都千代田区内幸町2-2-3  
〒100 ☎03(595)2211